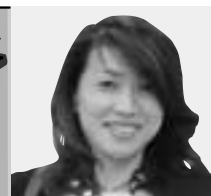
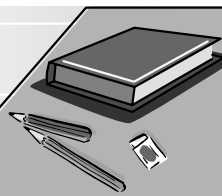


学生時代と図書館 60

- 夢の実現を支え続けてくれた図書館 -

吉田 真美



学生時代の私にとって、図書館の存在は、単に本や雑誌の閲覧を可能にしてくれる場以上のものであった。年齢とともに利用方法こそ変化して行ったが、図書館はいつも、思い悩んだ時に進むべき道を照らし、目標に向かう道中を支えてくれた。

学生時代、某体育会クラブに属して日々練習に勤しんでいた私にとって、授業に行く以外は、図書館が一日の大半を過ごすスペースであった。重いスポーツバッグを一日中持ち歩くのが嫌だったという理由もあるが、入学後5月病にかかった私は大学の交換留学制度への応募を目指すことでなんとか大学生活の意義を見つけ、図書館で黙々と勉強をしていた。必要条件としてのTOEFLでの目標のスコア取得は入学当初初には叶わぬ遠い夢に思われたが、これも図書館のお陰で達成できた。インターネットもCD教材もない時代に図書館が提供してくれる教材は、貧乏学生には有難く、使えるものは全て利用させていただいた。スコアが伸び悩み、行き詰りを感じていた私を励ましてくれたのも図書館の英字新聞や洋書などであった。英字新聞の求人広告欄を眺めては、英語ができるこんな職業にも就けるのかと英語のエキスパート達の世界に思いを馳せ、さらに勉強意欲が掻き立てられた。

このような図書館の支えもあって、卒業の前年度であったが、めでたく留学の夢が叶いアメリカのイリノイ大学で1年間交換留学生として勉強することになった。イリノイ大学の図書館は全米で5位に入るほどの蔵書数で、その規模だけでなく、図書館の多様な利用方法に恩恵を受けた。言語学の授業で出される課題のために書庫もよく利用した。レイブ事件が起こるほど広くて迷路のような書庫に恐々入るのだが、時間も怖さも忘れて課題と関係ない本に夢中になってしまうこともよくあった。学生のほとんどがキャンパス内またはその付近に住んでいるアメリカの大学では、図書館を年中夜中まで開放してただけでなく、帰りが遅くなっても夜間循環バスを利用して帰れるように安全面も配慮されていた。課題が多く、成績(GPA)によっては就職が困難になったり学校または学部を移籍させられる厳しい状況で勉強しているアメリカの学生達は、週末の夜を除いて図書館で本当によく勉強をしていた。地下のスナックコーナーでは、世界各国から集まった留学生の持ってくるお弁当を見るのも臭う(?)のも楽しかった。英語で24時間過ごす留学生には新聞コーナーで母語と触れる時間は癒しであった。

帰国後、進路に悩んでいた私に、見るのも嫌になっていた言語学の本をまた手にとりもっとやってみたいと思わせてくれたのもやはり図書館であった。その後進学し大学院生として図書館の研究書や学術雑誌をよく利用させていただいた。当時図書館長でもあった指導教官の授業ではいつも数多くの洋書が持ち込まれ、著者の解説も丁寧にさせていただいたお陰で、言語学者の国や所属大学を意識するようになった。そのお陰か研究書で目にしてきた著者に直接指導を受けるというチャンスが巡ってきた。イギリスの北部の湖水地方の近くにあるランカスター大学というところで一年間勉強することになった。大規模ではないが、言語学の主要な国際雑誌がほぼ全て揃っており、イギリス国内の大学間の相互利用が無料でできるなどの贅沢を味わった。毎日図書館にこもり課題に煮詰まると、分野の主要な学術雑誌を何時間も座り込んで読み漁っていたのだが、結果的には最新の研究動向を把握する貴重な訓練となった。

運動ばかりしていた女子学生が、図書館とこんなに深く係わりようとは思ってもよらなかったが、図書館の存在無しでは先に進めてはいなかったであろう。今後も様々な夢を実現しようと頑張っている学生達にとって図書館は進むべき道を照らし、夢の実現を支えてくれる存在であり続けてくれるに違いない。

よしだ まみ (講師・英語教育学)